

I 研究の概要について

〈研究主題〉

**主体的・協働的な学びを通して、多様性を認め合い、互いに高め合う人権教育
～人・もの・ことに関わって、自らの生き方を深く考えることのできる児童の育成～**

次の4つの育てたい資質・能力に絞り研究を進め、児童の将来の夢に人権の視点が生かされているような人権学習を創造し、多様性を認め合い、互いに高め合うことができる児童を育てたいと考えた。

育てたい資質・能力

- ①主体的に考え行動する力
- ②互いの相違を認め、受容できる能力
- ③他者とうまく意思疎通を図る能力
- ④自己についての肯定的態度

II 研究内容について

(1) 研究の柱

- 〔研究の柱1〕「『人・もの・こと』との関わりを大切に、児童が主体的に課題に取り組み、自分の生き方を学ぶ学習の展開」
- 〔研究の柱2〕「仲間づくりを通して、互いに認め合い高め合う活動の展開」
- 〔研究の柱3〕「教師自身の感性を磨く教職員研修の充実」
- 〔研究の柱4〕「人権感覚を培う環境整備」

(2) 実施方法

〔研究の柱1〕

「『人・もの・こと』との関わりを大切に、児童が主体的に課題に取り組み、自分の生き方を学ぶ学習の展開」

- ・一人一人が自らの生き方を考えようとする意欲を高める学習活動の創造を図る。
- ・地域の教材及び人材，ゲストティーチャーなどの積極的活用を図る。
- ・PDCAサイクルを生かした年間カリキュラムや教育活動を再構築する。
- ・一人一人が大切にされ，よさや可能性を發揮できる授業づくりを進める。
- ・仲間との協働を通して「話し合いやそれを受けての実践活動」，「振り返り」，「深い思考」を繰り返し，「行動化や態度化」へと進んでいく授業の工夫を研究する。

〔研究の柱2〕

「仲間づくりを通して、互いに認め合い高め合う活動の展開」

- ・全ての児童にとって安心・安全な居場所，互いのよさや可能性を認め合える学年・学級づくりを進める。

- ・互いのよさや可能性を認め合える異年齢集団（わくわく班）の活動を行う。
- ・日ごろの声かけや接し方を通して、挨拶や掃除、学習に主体的に取り組もうとする児童の育成を図る。

【研究の柱3】

「教師自身の感性を磨く教職員研修の充実」

- ・計画的な研修（人権教育に関する校内研修，人権学習授業研究会，識字学級との交流会，人権教育研究大会等への参加）を行う。
- ・組織的な連携体制（管理職・人権教育主事・生徒指導主任・学力向上推進員・特別支援教育コーディネーター・巡回相談員との連携，諸機関との連携）を構築する。
- ・風通しのよい職場環境（日常的な報告・連絡・相談，高め合うことのできる教職員集団）づくりを推進する。
- ・研究授業では，授業の様子をビデオカメラで映し別室で視聴するなど，ICT機器を活用したりリモート研修を取り入れる。ICT機器を活用した授業や実践について中学校区を単位とした小・中学校にも案内し，研修の時間を有効に活用する中で，学びを広げていく。

【研究の柱4】

「人権感覚を培う環境整備」

- ・互いのよさを認め合える学級，学年，全校人権コーナーを設置し，活用の促進を図る。
- ・児童のよさを広めたり学びを深めたりする委員会の取組を推進する。
- ・保護者への人権意識の啓発及び連携を図る。

【全体を通しての取組】

- ・全教職員で児童を見守り，常に情報交換を行いながら指導に生かす。
- ・中学校区の人権教育研究大会や保・幼・小・中との交流活動をもとに，校種間の連携・協議を密に行い，本校人権教育の評価と改善を図る。
- ・学校だよりを全家庭に配布し，ホームページで発信するなどして保護者や家庭，地域との連携を図る。

(3) 検証・評価方法

- ①人権や学校生活，学力向上など様々な視点から，児童・保護者・教職員に対して定期的にアンケートを実施し，PDCAサイクルで実践力につながる成果を検証する。
- ②人権ファイルや授業の振り返り等，児童一人一人の人権意識に関する記録を残し，児童の考えや態度の変容から人権意識や実践への意欲の高まりを検証する。
- ③授業研究会等において教職員相互に評価を行い，教職員の授業力の向上や人権意識の高揚を図る。
- ④保護者や学校評議員，地域の方の意見をもとに教育活動を客観的に評価し，人権教育の成果を検証する。

Ⅲ 特別支援学級・各学年の取組(一部抜粋)

(1)本校重点課題に対する取組

①主体的に考え行動する力

㊦グループ会社活動(第1学年の取組)

学級生活がより楽しくなるように話し合っグループ会社を考え、活動している。各会社のメンバーは、希望者で構成し、活動内容や活動する日時も相談して決定した。自主性を大切にしながら、活動をよりよくするために考える機会を設けている。「読み聞かせ会社」は読んでほしい本を募ったり、「クイズ会社」は解答用紙を自ら作成したりしている。児童は、自分たちの考えで友達が楽しんでくれることに喜びを感じている。

㊧グループ活動での話し合い(第3学年の取組)

いろいろな教科で話し合い活動を取り入れることによって、自分の考えを表現する力を付けたいと考えた。主体的に考え行動するためには、まず自分の考えをもつことや伝えられることが大切である。また、話し合いの後、友達の見解のよかったところを振り返る時間を取り、付箋に記して伝え合うことで、自他の考えのよさを再認識できるようにするなど、一人一人の考えが認められるようにした。



〈グループ活動による交換意見〉

㊨自分たちの周りの課題についての話し合い活動(第5学年の取組)

係活動や当番活動、学校生活で困ったことや気付いたことなどについて、朝の活動や学級活動の時間に定期的に話し合いの機会を設けた。それぞれが自分の思いや考えを自由に発言することにより、学校生活での隠れた問題点を明らかにし課題について共有することができた。またお楽しみ会やイベントでは、互いにアイデアを出し合い、一人一人が集団の一員としての自覚をもって活動に取り組んだ。これらの活動を通して支え合う仲間としての意識を高めたり、温かい友情関係を築いたりできるようになってきた。

㊩新聞コーナー(第6学年の取組)

教室内に「新聞コーナー」を設け、現在学習中の内容に関係ある記事や様々な人権課題につながる記事を紹介し、掲示している。そうすることで、社会情勢や人権問題に対する認識を深め、課題意識をもつことにつながっていくのではと考えた。「先生、〇〇の記事載ってたよ。」と児童が切り抜きを届けてくれたり、休み時間に新聞コーナーの前で学級の仲間と話をしたりする姿が見られるようになってきた。



〈教室内の新聞コーナー〉

②互いの相違を認め、受容できる能力

㊦ほめことばのシャワー(第1学年の取組)

児童の顔写真を貼った日めくりカレンダーを作成し、今日は「〇〇さんの日」と設定して、帰りの会に「ほめことばのシャワー」のコーナーで、学級のみinnなでよさや頑張りを伝えている。授業中だけでなく学校生活全般で友達のことを見つめることで、今まで気付かなかった友達のよさや頑張りに気付く機会となっている。また、児童は自分の日がやってくるのを楽しみにしており、伝える側も伝えられる側も温かい気持ちになっている。

㊧ふわふわことばとちくちくことば(第1学年の取組)

相手が温かい気持ちになる言葉「ふわふわことば」、反対に嫌な気持ちにさせてしまう言葉「ちくちくことば」について考え、ふわふわことばのコーナーを背面に掲示し、たくさんのふわふわことばを集めることに取り組んだ。友達から声をかけられてうれしかった言葉をカードに書き、帰りの会で伝え合っている。さらに、友達の改めてほしい言動に対して、どう言えばよいのか機会を捉えてみんなで一緒に考え、ふわふわことばのコーナーの横に掲示している。

㊨ペア活動・グループ活動(第1学年の取組)

授業の様々な場面で、ペア活動・グループ活動を積極的に取り入れた。互いに考えを伝え合ったり協力し合ったりすることで、友達の新たなよさや知らなかった一面に気付く機会をつくっている。特に生活科では、グループで生き物の世話をしたり、季節の遊びを工夫して楽しんだりするなど、それぞれの得意なことを認め合い、苦手なことを助け合える機会を大切にしている。

㊩会社活動(第4学年の取組)

児童の個性を生かし、主体的に係活動を行えるようにそれぞれの係を「会社」とした。児童は、自分の得意なことや好きなことを生かし積極的に取り組んでいる。本を読むのが好きな児童は「ストーリー会社」で読み聞かせをしたり、また、みんなの意見をまとめるのが苦手だと思っている児童が進んで「お楽しみ会社」でみんなを楽しませたいと計画し意見をまとめて活動したりしている。



〈会社活動〉

㊪互いのよさを見つける活動(第5学年の取組)

一人一人の児童が、友達に対する固定的な見方や短所を強調して捉えがちな傾向を見直すため、学校生活で互いのよさに気づき、認め合える仲間づくりができるように、友達のよさについて気付いたことを帰りの会で発表し合う機会を設けた。

③他者とうまく意思疎通を図る能力

㊦コミュニケーション能力の育成(生活単元学習)(特別支援学級の取組)

生活単元学習では、2，5年生のグループと3，4，6年生のグループに分かれて様々な活動をしている。共同制作では、特別支援学級の児童が互いに協力し合って折り紙や、野菜スタンプで「気球旅行」を表現した。折り紙で表現する部分を作るときには、6年生が「次はここを折って。」と丁寧に教えていた。下学年も、「これ分からない。」「どうしたらいいの。」などと自分から尋ねることができるようになってきた。また、野菜スタンプで背景を表現するときには、譲り合って活動する姿や、作品全体を見て「もっと鮮やかにしたい。」など、自分のイメージを伝え合う姿が見られるようになった。声をかけ合えるように座席の配置を工夫した効果の現れであると考え。活動の振り返りでは、楽しかったことやうれしかったことだけでなく、誰のどんな行動や声かけがよかったかなどにも気付けるように問いかけている。



〈共同制作の様子〉



〈「気球にのってでかけよう」〉

㊧「お掃除大作戦！」(生活単元学習)(特別支援学級の取組)

普段何気なくしている掃除の仕方をどんな方法でするのがよいかをみんなで考えた。ほうきのはき方では、昨年度も生活単元学習で練習している4年生が「持ち方はこうです。」「はき方は、ゆっくりはきます。」と手本を見せてくれた。それに対して2年生も、「知らなかった。」「やってみたい。」と感想を述べる事ができた。実際に教室の中を掃除してみた後で感想を聞くと、「〇〇さんは素早く掃除できていた。」「△△さんは枠の中にゴミを集めていた。」などの声が聞かれた。それを聞いた児童はうれしそうにしていた。感想を交流したり、互いを認め合ったりする中で、励ます言葉がけができるようになってきた。

㊨スピーチ(第6学年の取組)

朝や帰りの会の中で、新聞記事やニュース、自分の興味関心があることについてスピーチする場を設け、自分の考えや思いを伝えながら表現力を高めていく。聞く側も質問や感想を述べながら取り組むことでさらに互いの思考力や表現力も高まっていくと考え、取り組んだ。この活動を積み重ねることで互いの考えの共通点や相違点を共有したり、社会の出来事や様々な人権課題にも興味をもったりしながら広い視野で物事を考えられるようにしたい。

④自己についての肯定的態度

㊦35人35色「みんなちがってみんないい」(第2学年の取組)

友達のよいところやみんなのために頑張っていることをカードに書いて帰りの会で発表し、教室内に掲示している。友達の得意なことやよくできていることは「〇〇名人カード」に、みんなのために頑張っている行動は「自由カード」に書く。回を重ねることで、「トイレのスリッパをそろえていたね。よく気がつくね。」や「掃除のときにてっだってくれてありがとう。やさしいね。」など、友達のよいところを見つけ自分の言葉で伝えられるようになってきた。友達や教師からのカードがたまっていくことで、自分のよさや頑張りに気付き、自己肯定感が高まっている。



<35人35色>

㊧絵本『しげちゃん』(第2学年の取組)

絵本『しげちゃん』を読み聞かせ、自分の名前が好きになれなかった主人公が名前に込められた思いを知り、名前を大切にしていこうとした話から、自分もかけがえのない大切な存在であることを理解させ、自己肯定感を高めさせたいと考えた。名前に込められた家族の願いを聞き、伝え合うことで自分も友達も大切にしていこうという意欲をもつことができた。

㊨「ええところ」見つけ (第3学年の取組)

友達に自分のよさや頑張りを認められることにより、自己肯定感を高められると考え、帰りの会で、友達のすてきなところを紹介し合う時間を設けた。何かができた結果に着目するよりもそこに至るまでの努力や、優しさ、思いやり、考え方についてよいところを見つけられるようにした。また、背面黒板に「3年〇組のええところ」コーナーを設けて掲示することで、いつでも学級のよさに気付くことができ、もっと自分のよいところを増やそうとする意欲を高められると考え、取り組んだ。

㊩学級の安心ルール(第4学年の取組)

児童が自分のことをありのままに受け止めてもらい安心できる学級にするために、自分が不安になる内容を伝え合った。そして教室にどんな約束があれば安心するかを話し合い、自分たちの学級に合った安心ルールをつかった。「『同じです』など反応をしてくれたら安心する。」「ちゃんと言葉で伝えてくれたら安心。」などの意見が出た。児童は、ルールがあることで話し合いやすく学びやすくなることに気付くことができた。自分たちで話し合ったルールを常に意識させながら授業に取り組んでいる。



<安心ルール>

IV 全校での取組

1 わくわく班(異年齢集団)の活動

本校では、伝統的に1年生から6年生までの異年齢集団を編成し、様々な活動を行っている。班編成は、赤・白・青・黄の4色チームをさらに6班ずつに分け、約20名の24班となっている。年度初めに、6年生が中心となって班旗を作成し、班のめあてや全員の名前を書き込んでいる。毎月3回程度朝の活動の時間に、わくわく班遊び活動や委員会の発表の時間をとり、各班の仲間意識を高めている。また、運動会、オリエンテーリング、人権集会などの行事や、まり入れや綱引き大会などのレクリエーションもわくわく班で活動している。異年齢で行うことにより、自然と新たな人のつながりができ、高学年は上学年としての自覚をもち、低学年は上学年へのあこがれや尊敬する心が育っている。このような活動の積み重ねにより、6年生になるとしっかりとリーダーシップをとることができるようになる。わくわく班での活動は、児童の仲間意識を培い、主体性や協働性を養う大切な取組の一つである。



〈わくわく班の旗〉

(1)オリエンテーリング

本校のオリエンテーリングは、班で協力クイズに答えたりゲームをしたりしながら、校内や地域を巡っている。令和2年度は、旧中林分校コースと旧大湊分校コースに分かれ実施した。6年生は、事前に話合いや打ち合わせを繰り返し、みんなが安全で楽しいオリエンテーリングになるよう周到に準備をした。当日も、励ましの声かけをしたり、低学年に負担をかけない速度で歩いたり、常に全体に気を配り活動できていた。この活動を通し、高学年は優しさや支え合いの大切さを学び、低学年や中学年は高学年の優しさやリーダーシップを感じ感謝の気持ちをもつことができている。それぞれの班が全員を大事にし絆が深まるよい機会となっている。

また、地域の様々な箇所を巡ることにより、校区の歴史を学んだり、行ったことのない場所を知ったりすることができ、ふるさとを学ぶよい機会になっている。



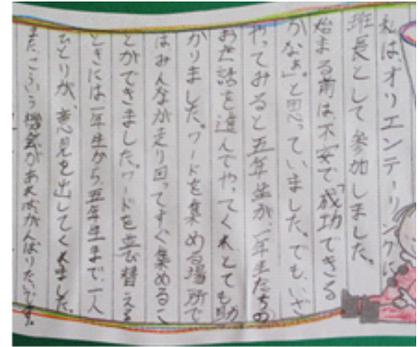
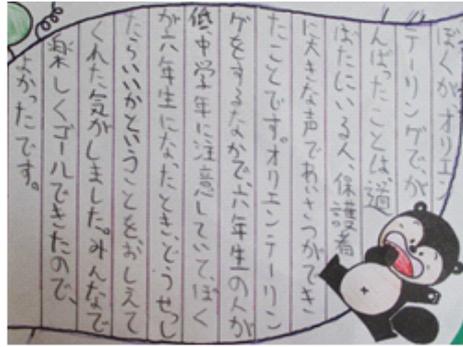
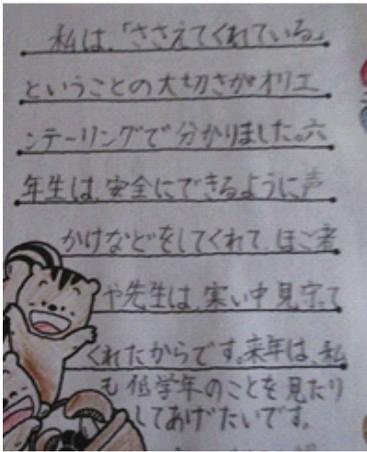
〈千福寺記念撮影〉



〈大湊分校跡地でワード探し〉



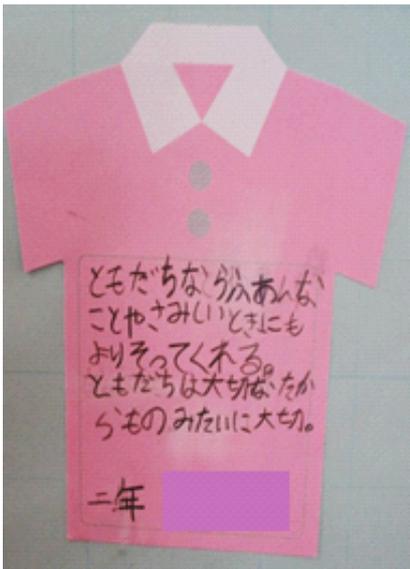
〈班ごとのお弁当タイム〉



〈児童の感想〉

(2) 人権集会

毎年12月に、わくわく（人権）委員会が中心となって人権集会を行っている。令和元年度は、「SNSによるいじめ」をテーマにした劇を観てわくわく班で話し合った。令和2年度は谷川俊太郎さんの作品「ともだち」を朗読し、「友達って何?」「友達なら・・・」「一人ではできなくても」など絵本の中に出てくるフレーズをもとに、友達の大切さについて各班に分かれ話し合った。そして、自分の考える「友達」とは何かをピンク色のカードに書き、全員の分を貼り出した。このカードはいじめをなくす取組として広がりつつある「ピンクシャツデー」活動にちなんだものであり、その趣旨や目的も児童に伝えている。この活動を通して、一人一人が本校の大切な存在であること、自分の周りには支えてくれる友達がいることなどを感じ取ってほしいと考えた。また、友達に対して自分にできることは何かを考え、主体的に実践できる児童に育ててほしいと願っている。集会後の感想を読むと、どの学年も改めて友達の大切さについて理解し、大切にしていこうという思いがあふれていた。今後も、このような活動を通して自分も友達も大切にできる児童を育てていきたい。



〈ピンクシャツカード〉



〈人権集会後の掲示〉



〈各班での話し合い〉



〈話し合いの感想発表〉



(3) わくわくミニ集会(遊び活動)

毎月1, 2回朝の活動の時間に、わくわく班のミニ集会を行っている。令和元年度までは、委員会の発表を見て話し合いをしたり、クイズに答えたりする活動が主であった。この機会を仲間づくりのためにもっと有効に活用できないか考え、令和2年度から、各班での遊び活動も行うようにした。令和2年度の前期は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため一度も集会活動は実施できなかったが、後期になってからは、各教室に分かれて話し合うことで密を回避する方法を取り入れたり、屋外での活動をメインに班で遊ぶ活動を設定したりするなど新たな実践を進めてきた。令和3年度は、できるだけ回数を増やし、体を動かす活動やけん玉などの昔遊び、ジャンボトランプなど様々な活動を通して、互いのよさを発見し班のつながりを深める楽しい時間を共有していく計画を立てている。

また、毎回児童は自分の振り返りをしており、書き残したものを児童の成長や変容を知る手立てにしている。さらに、各担当の教員がその日の児童の様子を記録し、全職員が共有するとともに、児童の新たな面を発見したり支援に役立てたりしている。

児童の振り返りや活動の様子を見ると、高学年は上学年としての意識をもちながら下学年に接する姿があり、下学年も優しく頼もしい先輩の姿を見ながら、楽しく活動している。さらにこのつながりが、普段の学校生活にも広がり、新型コロナウイルス感染症の影響で疎遠になりがちであった異学年の関わりが活動の積み重ねとともに増え、休み時間など異学年が自然と関わり合う日常が徐々に戻りつつある。



〈活動の様子〉

2 児童会・委員会の取組

(1) 児童会の取組

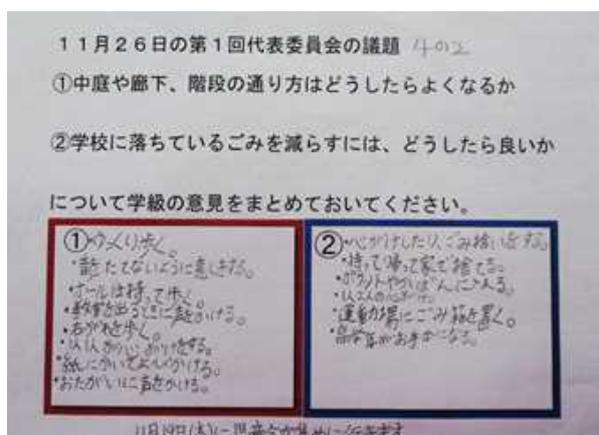
本校では、6年生で編成されている児童会があり、週目標の決定や全校朝会の進行、代表委員会の進行などを行っている。児童会のメンバーは、全校の様子を観察し、その現状から取り組まなければならない週目標を決定している。さらに、代表委員会で話し合ったことをもとに自分たちができることを考え実践している。学校生活の課題を自分たちで見つけ出し、解決に向けみんなで話し合い実践に移していくことにより、規範意識を高め自分たちの力で学校をよりよくしていこうという主体性を身に付けることにつながっている。

① 代表委員会

代表委員会では、学校の課題について各学級で練り上げた意見を持ち寄り、みんなが楽しく過ごせる学校づくりをめざして活発な意見が交わされている。令和2年11月に行われた代表委員会では、「①中庭や廊下、階段の通り方はどうしたらよくなるか」「②学校に落ちているごみを減らすには、どうしたらよいか」について、各学級でまとめた意見をもとに話し合いが行われた。代表委員会で決まったことは、児童会が全校朝会で知らせ、作成したポスターを廊下に掲示することによって全校児童に啓発を行っている。

また、6年生では、代表委員会や各委員会で話し合ったことや決めたことなどを率先して実行することにより、最高学年として学校や学級の問題点を意欲的に解決する実践力を付けることができている。このような経験を積み重ねることによって、様々な立場や環境にある人に積極的に関わる力が身に付き、様々な場面で互いに支え合う姿が数多く見られるようになった。

〈各学級でまとめた意見〉→



〈代表委員会の様子〉

② 見能林小学校キャラクター「こめこま・うみこま」

平成30年度の代表委員会で、みんなが親しめる見能林小学校のキャラクターを創り、いろいろな行事を盛り上げていきたいという案が出た。そこで、各クラスで話し合ったキャラクターの中から決まったものが「こめこま・うみこま」である。このキャラクターは、林崎神社や津乃峰神社など地域にたくさんある神社の狛犬をモチーフにしている。「こめこま」には見能林地区特産の米、「うみこま」には北の脇海岸にいる魚や貝を描いている。親しみやすく、地域全体が小学校を見守ってくれているという思いが込められており、ふるさとを大切にできる気持ちがあふれている。キャラクターは、校内の玄関や多目的ホールなどに掲示するとともに、学校だよりや人権通信、運動会のプログラムなどに掲載し、保護者や地域の方にも親しんでもらっている。



〈こめこま〉

〈うみこま〉

(2) SDGsの取組(各委員会)

令和3年度の委員会組織を決めた後、各委員会の6年生が中心となり、自分たちの委員会で取り組むSDGsの開発目標を考えた。その目標に向かって何ができるかを自分たちで考えることにより主体的で協働的な活動ができると考える。

この目標を決めるにあたって、令和3年3月に「2030 SDGs公認ファシリテーター」である阿南工業高等専門学校の講師と出会い、児童はSDGsの本質について学ぶことができた。学習後「17の目標を達成するには一人だけ頑張るのではだめで、みんなの頑張りが必要だと思った。」「自分のことばかりではなく、他の人のことも考えなければいけないと気付いた。」「貧しい暮らしをして大変な人がいると分かった。ぼくは、また一つ新しいことに気付いた。」「改めて私たちの力で世界を変えることができるのだと分かった。」など協働の大切さや自分だけでなく他の人のことを考える大切さを学ぶことができた。

委員会では、この活動で学んだことを生かして選んだ目標に向かい、自分たちでできることに取り組んでいこうとする意欲が感じられた。コンビニ(購買)委員会では、「12. つくる責任 つかう責任」を選んでいった。「使う側として最後まで使い切る責任がある。」「売る側として、最後まで大切に使うことを呼びかけることができる。」などの理由をしっかりと考えていた。また、「15. 陸の豊かさを守ろう」は、「再生紙を利用したノートを売ることで、森林を守り陸の豊かさを守ることになるから。」という理由を考えていた。保健委員会では、CO₂の削減や途上国の医療支援につながる「エコキャップ運動」の活動に取り組んでいる。この活動は児童が簡単に取り組むことができ、校内だけでなくこの運動に取り組んでいる外部の方との関わりをもつことができる。また、一人一人の力は小さくても、みんなで協力したり心がけたりすることでSDGsの取組につながるということを知るきっかけになってほしいと考えている。

また、下学年に関心をもってもらうために、わくわくコーナーに「SDGsすごろくゲーム」やSDGsに関する図書を置き、自由に遊んだり読んだりできるようにした。休み時間に自然と集まり、

学年関係なく遊んでいる様子はとても微笑ましく、SDGsの取組はSDGsへの関心はもちろん仲間づくりの一端を担うことができた。

今後も活動内容を見直しながら、児童自らが主体的に学校や地域へ発信していけるよう取り組んでいきたい。



〈SDGs学習の様子〉

〈掲示物〉

〈SDGsすごろく〉

委員会名	取り組む目標	委員会名	取り組む目標
児童会	4 質の高い教育をみんなに、10 人や国の不平等をなくそう、16 平和と公正な世界を築こう	コンビニ（購買）	12 つくばない、つかうを賢く、15 陸の豊かさを保ち、増やそう
スポーツ	3 すべての人に健康と福祉を、4 質の高い教育をみんなに	わくわく（人権）	5 ジェンダー平等を推進しよう、10 人や国の不平等をなくそう
ブックカウンター（図書）	3 すべての人に健康と福祉を、12 つくばない、つかうを賢く	アニマル（飼育）	3 すべての人に健康と福祉を、4 質の高い教育をみんなに、15 陸の豊かさを保ち、増やそう
保健	3 すべての人に健康と福祉を	ボランティア（奉仕）	7 エネルギーをみんなに、クリーンに、15 陸の豊かさを保ち、増やそう
給食	2 質の高い食料安全保障を、3 すべての人に健康と福祉を	グリーンエコ（環境）	6 清潔な水とトイレを世界中に、15 陸の豊かさを保ち、増やそう
お知らせ（放送）	4 質の高い教育をみんなに、8 働きがいも経済成長も、11 陸の豊かさを保ち、増やそう	ミュージック（音楽）	3 すべての人に健康と福祉を、16 平和と公正な世界を築こう

〈各委員会で取り組むSDGs〉

(3) 給食委員会の取組

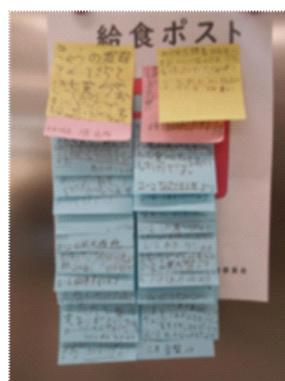
給食委員会は、給食が届けられるまでに関わる人とのつながりを感じられる活動をめざしている。また、毎日食べている給食は、様々な人に支えられて食べることができていることや、食への感謝の気持ちをもつことができるよう取り組んでいる。

① 「給食ポスト」を介しての調理員さんとのつながり

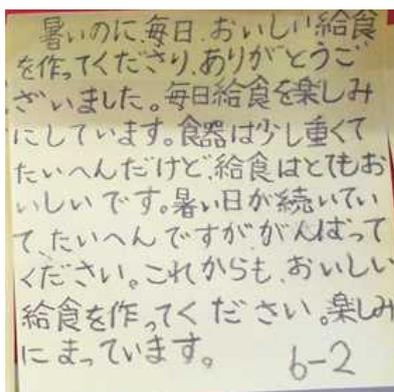
7月に「給食ポスト」を設置した。令和元年9月までの給食は、本校敷地内にある給食室で調理されており、児童は直接、調理員さんに「いただきます。」「ごちそうさま。」「おいしかったです。」と伝えることができていた。しかし、場所が離れた給食センターでの調理になっ

てからは、みんなの声が調理員さんに伝わっていないことに委員会の児童が気づき、「給食ポスト」を設置することになった。その日の給食について児童がメッセージを書く。給食当番がそのメッセージを給食室のポストに貼る。そして、そのポストを給食センターの調理員さんに届けてもらう。当番制などではなく児童の自発的な取組なのでメッセージがない日もあれば、たくさん貼られる日もある。「苦手な給食だったけど、全部食べたよ。」「親子丼おいしかったです。また作ってください。」そんな子どもの素直なメッセージが調理員さんに届けられている。

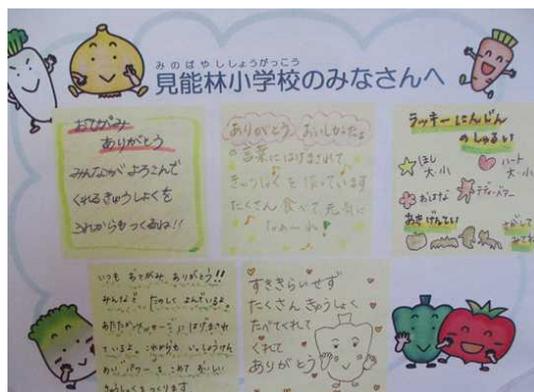
すると8月に、調理員さんから「からっぽの食缶を見るとうれしいです。」「おいしくなかったときは、おいしくないと言ってね。」などと書かれた返事が来た。児童は「おいしいときしかないです。」や「コロナをいっしょにのりこえていきましょう。」と返事を書き、今もメッセージのやりとりが続いている。栄養士の先生も「今度給食に地元特産のハモが出るから、ハモのDVDを見せてください。」とDVDを届けてくれたり、調理員さんがいつでもメッセージを見ることができるよう給食センターに貼り出してくれたりしている。令和元年度までのように直接会えなくても、給食の向こうに調理員さんがいる。そのことを児童が実感できたことがうれしい。今後も給食を通してのつながりがもっと深まるように、委員会の活動を続けていきたい。



←「給食ポスト」
コーナー



〈児童からのメッセージ〉



〈調理員さんからの返事〉

② 特別支援学級の友達とのつながり

本校では、給食時に使う台ふき用の布巾を、毎週金曜日に特別支援学級（わかくさ・ひまわり）の5、6年生が洗濯し、月曜日に各クラスの手紙ボックスに入れている。しかし、そのこ

とを知っている児童は、ごくわずかだった。そこで、給食委員会が全校朝会でそのことをクイズに出題して紹介すると、多くの児童が「ええっ。」と驚いていた。知らないところで、みんなのために活動している友達がいることに気付いた児童が、これからどんな関わりをもとうとするのか楽しみである。これからも給食を介して、たくさんの人とのつながりに気づき、そのつながりを大切にしようとする取組を委員会の児童と考えていきたい。

(4) わくわく(人権)委員会の取組

わくわく委員会は、自分や友達を大切にし、明るく元気な挨拶が響く学校をめざし活動に取り組んでいる。常時活動では、朝の挨拶運動や友達のすてきなところを書いたカードの紹介をしている。また、毎月の誕生集会や12月に行う人権集会の計画や進行を行っている。月1回の委員会活動では、6年生を中心に常時活動での問題点について考えを出し合い、自分たちが話し合ったことを実行しようと努力している。このような活動を通して、自分や友達を大切にし、自分たちの町や学校を誇りに思う児童を育てたいと考え取り組んでいる。

① 誕生集会

毎月、第4週の全校朝会で誕生集会を行っている。その月に誕生日を迎える児童は、全校児童の前で自分の抱負や頑張っていることを発表する。令和2年度は、新型コロナウイルス感染防止のため、全校朝会をリモート朝会で行ったので、児童の顔が大きくはっきり分かるよさがあった。

9月からは従来の体育館での全校朝会となった。1年生が、緊張しながらも自分の頑張っていることを一生懸命発表する姿はとても微笑ましい。そして、高学年に進むにつれ長い文章で抱負を発表する姿は下学年のすばらしい手本になっている。また、発表に詰まり時間を要する児童がいても温かく見守ることができている。このように一人一人の頑張りを全校児童で共有することは、友達を大切にすることにつながっており、自己肯定感の育成や互いの相違を認め、受容できる能力の育成につながると考える。



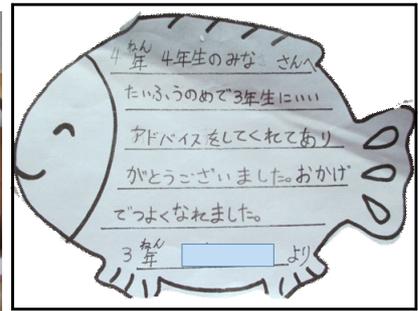
〈誕生集会〉

② 「わくわくたのしい見小っ子」コーナー

令和2年度から、人権コーナーを新館1階の廊下に移し、児童のすてきなところを紹介している。ボックスに入れてもらったカードを毎週水曜日の給食時に放送で紹介し、掲示板に貼っている。どんどんすてきなカードが増えていくのを児童も教職員も楽しみにしている。掲示板の下方には、校区の風景が広がっている。津峰山や水田、北の脇海岸などふるさとの風景に桜や稲穂、魚や貝のカードが貼られており、ふるさとや友達を大切にする見小っ子に育ててほしいと願い活動に取り組んでいる。

また、「人権についてみんなで学ぼう」コーナーを、掲示板の中央に設け、人権標語などの作品を掲示したり、「教科書無償運動」「阿南市小学校人権かるた」「SDGsって何？」などの啓

発資料を提示したり全校で人権について学べるようにしている。休み時間に読んでいたり友達と話し合ったりしている姿が見られ、啓発の一端を担っていると考える。



〈「わくわくのしい見小っ子」コーナー〉

〈児童が書いたカード〉

3 「阿南市小学校人権かるた」の活用

阿南市では、毎年「阿南市小学校人権かるた」を活用し中学校区ごとに各小学校の代表児童が集まり交流をしている。このかるたは、以前取り組んでいた「同和かるた」に代わり制作したものである。平成14年度に市内全ての小学校が分担し、様々な人権課題をテーマに読み札と絵札を考えた。この「人権かるた」には、学ぶ場所は違っても、阿南市内の小学校を巣立ったすべての児童が、人権問題解決に向けた思いを共有し、人権問題の解決に積極的に関われる人になれるようにとといった熱い願いが込められている。



〈阿南市小学校人権かるた〉

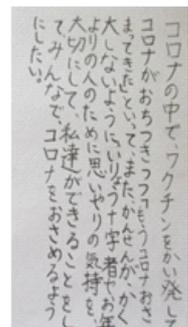
令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中学校区の交流会は中止となったが、本校では、このかるたを活用し、身の回りにある差別について考える時間をもった。そして、各学年の発達段階に合わせ、この人権かるたに込められた思いについて考えた。4年生では、自分たちも読み札を作りたいと考える児童も出てきた。そこで、人権学習を進める中で、人権問題に対する自分の思いを込めた読み札作りを継続していった。児童の思いや意識の流れを大切に、児童自身が今自分に何ができるかを考え次の学習につながった、まさしく主体的な学びの姿である。このように児童が主体的に取り組もうとする姿は生き生きとしている。



〈自作の人権かるたをしている様子〉



〈4年生製作の人権かるた〉



V 研究の成果と課題

1 アンケートの実施（省略）

2 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

①【研究の柱1】「『人・もの・こと』との関わりを大切に，児童が主体的に課題に取り組み，自分の生き方を学ぶ学習の展開」について

- 児童の学習課題に対する意識の流れを大切に「人・もの・こと」との関わりを継続することにより，児童は，自分のこととして人権学習に取り組み，より深く相手のことを考えたり思いに寄り添ったりすることができるようになってきた。
- 人権学習だけでなく，様々な教科指導において，体験や交流活動などを積極的に取り入れることで児童の主体性が育ちつつある。「次はこうしたい」「自分たちもやりたい。つくりたい。発信したい」と考え，充実感を味わうことができた児童が多くなっている。
- ゲストティーチャーの方が大変協力的であり，地域の方との交流が深まり充実した交流学习ができた。地域の方から見能林への思いや将来の夢につながる話を聞くことができ，改めてふるさと見能林や自分の生き方について考えることができた。今後も児童・地域・学校の交流活動が継続して行えるよう取り組んでいきたい。
- ペア学習やグループ学習を行ったり，ホワイトボードやタブレットを活用したりすることにより，自ら表現することに消極的であった児童も，自分に合った方法で自分の思いや考えを伝えることができるようになってきた。

②【研究の柱2】「仲間づくりを通して，互いに認め合い高め合う活動の展開」について

- わくわく班活動については，6年生にとって，①「主体的な考えや行動する力」②「互いの相違を認め受容できる能力」③「自己についての肯定的態度」④「他者とうまく意思疎通を図る能力」のどの項目についても関わりが大きく，各行事やわくわく班活動を終えた後の感想から，一人一人の成長が見られた。ただ行事をこなすだけでなく，児童に目標をもたせ，自分で考える場を設け，活動を振り返る機会をもたせるという一連の活動を意図して行った成果であると考え。また他学年にとっても，互いのよさや可能性を認め合えるよい機会になった。
- 安心・安全な学級経営という面では，日頃の児童の様子やアンケートの結果をもとに，一人一人の児童に寄り添い行ってきた日々の小さな積み重ねがよりよい仲間づくりにつながっている。児童も，学級や学年の仲間づくりを通して，自己肯定感の高まりが見られ，互いの相違を認め合うことができるようになってきた。

③【研究の柱3】「教師自身の感性を磨く職員研修の充実」について

- 授業研究会では，毎回グループのメンバーを変えワークショップ型で実施しているので，年齢を問わず意見が出しやすく学ぶことが多い。今後も様々な方法を取り入れながらよりよい授業研究会にしていきたい。
- 校内研修において課題別研修を取り入れたことにより，限られた時間の中でより効果的な研修を行うことができた。自分が学びたい内容について研修することにより，教職員自身が主体的に学ぼうとする意欲をもち，研鑽することで，教職員自身の人権感覚に高まりが見られ，人権学習への取組が意欲的になってきた。今後も，人権教育に限らず様々な研修に取り入れていきたい。
- これまでの生活アンケート等に加えて人権アンケートを実施したことによって，児童の実態を具体的に捉え，教師自身が自らを振り返り今後の指導について考えるよい機会になった。

④【研究の柱4】「人権感覚を培う環境整備」について

- 家庭との連携においては、毎月1回の「家庭人権学習の日」の取組の効果は大きく、課題の一つである自己についての肯定的態度の育成にも大きな効果をもたらしている。今後もマナー化しないように、課題を変えたり家庭での取組を紹介したりしながら取り組んでいきたい。
- わくわく委員会による人権コーナーは、人権に関する作品を掲示するだけでなく、「SDGsすごろく」や「人権かるた」、人権に関する絵本を置くことにより、多くの児童が関心をもつよい機会となっている。また、わくわく委員による児童のよさを紹介する放送は、他学年との関わりを深めるよいきっかけになり、当たり前と感じていたことに感謝の気持ちをもつことができるようになった。今後も充実した活動にしていきたい。

(2) 今後の課題

①【研究の柱1】「『人・もの・こと』との関わりを大切に、児童が主体的に課題に取り組み自分の生き方を学ぶ学習の展開」について

- 「人・もの・こと」との関わりにより心情を感じ取ったり、正しい知識を理解したりすることは成果が見られたが、行動化・態度化の点においてはまだ十分であるとは言えない。学んだことを生かし行動できるようにするために、どのような学習を展開していかなければならないか、さらに研修を深め取り組んでいかなければならない。
- ICTは主体的な学びを展開するうえで、有効なツールの一つである。また、教えるという立場ではなく児童と共に学んでいくというスタンスに立つことも大切である。今後、さらに活用方法について研修を深め、主体的・協働的な学びにつなげていきたい。

②【研究の柱2】「仲間づくりを通して、互いに認め合い高め合う活動の展開」について

- わくわく班活動については、これまでの伝統を大切にしながら異年齢集団のよりよいつながりが育つ充実した活動をめざし、PDCAサイクルをしっかりと行い、新たな活動にも取り組んでいく必要がある。
- 学級経営・学年経営においては、仲間づくりを核に取り組んでいるが、偏見や差別に立ち向かい、共に行動できる仲間づくりはまだまだ十分であるとは言えない。生涯にわたり差別をなくすために共に行動できる仲間とつながれるよう、さらなる仲間づくりを推進していきたい。
- 挨拶や清掃活動、学習規律など、生活の基本となることについて共通理解のもと全校体制で取り組むことが、学校生活の充実につながり人権教育に結び付いていくと考える。今後、さらに児童会や委員会の活動を活発にしていくとともに、教職員の意識の向上を図り取り組んでいきたい。

③【研究の柱3】「教師自身の感性を磨く職員研修の充実」について

- 令和2、3年度と、新型コロナウイルス感染症のため、識字学級生の方との交流を行うことができなかった。識字学級生の方の思いを直接聞くなど「差別の現実から学ぶ」機会は、同和問題解決への意識の高まりにつながる。状況を見て、今後感染対策を行いながら実施する方向で検討していきたい。

④【研究の柱4】「人権感覚を培う環境整備」について

- 今回の研究を通じて、学校と地域とのつながりが大変深まった。今後もよりよい連携を進めていくためには、ホームページ等で学校の様子を発信するとともに、地域の情報をキャッチするためのアンテナを高くするなど、学校を開放し常に地域の方と情報交換ができるようにすることが大切であると考えます。

○各委員会活動でSDGsに取り組んでいるが、人権教育と結び付けた活動ができるようSDGsについて教職員の研修を進めるとともに、児童の学びを深める必要がある。そして、学びを生かし自分たちができることを考えていく児童の育成が大切である。